

## 日本語の文法について (91・4・18)

高橋 太郎 (昭24・文丙)

ご紹介にあずかりました高橋でございます。先日安部さんからお電話いただきましたとき、「どんなおはなしすればいいんですか。」とおたずねしたら、専門のはなしをしろといわれましたので、文法のはなしをすることにしました。

じつは、わたくし、中学校のときに文法の研究者になりたいとおもったんですが、なぜそうおもったのかともうしますと、四段活用がカ・キ・ク・ケ・ケと変化するんですね、「動詞がアイウエオ順に変化する」というのは、すばらしいことだ。こういうものを研究したい。」とおもったんです。けれども、その後、文法を商売にするようになってから、わかっただんですが、これは、そんなすばらしいもんじゃありませんね。この活用表をつくった本居宣長は、いちばん基本的な終止形を最初においていたんです。それが途中からアイウエオ順にかわった。アイウエオ順になったということは、意味がなくなっただけのことなんです。つまり、寄付金の名簿をつく

るとき、言いだしべえから先にかくとか、たくさんだしたひとから順にかくとか、そういうことをさけるために、アイウエオ順にならべます。それとおなじで、「この形は、こんな役目をする」という理屈をうしなつた証拠として、アイウエオ順にならんでいるにすぎないんだということがわかりまして、がっかりしたんですけれども、そのほかにすることがいっぱいありますので、いままですつと文法の研究をつづけてきたような次第です。

そこで、きょうは、わたくしどもが、いまやっている文法研究のかんがえかたについて、おはなしもうしあげたいとおもいます。おもちしたコピーは、わたくしの講義、わたくしがワープロをうってつくつた講義テキストのコピーです。問題があつたりして、失礼なんです、学生用のテキストですので、ごかんべんください。

### 一、文と単語が分化していることの重要性

それで、きょうは、文法について二つのことをもうしあげたいとおもうんですが、まず最初に、文と単語という二つの単位があるということの重要性について、はなします。

### 文のくみたては投影図方式

これは学生にやらせるんですが、「つぎの文がそれぞれ二つにわけられて、絵がわけられない

## 第1章 文法とはなにか

### 1. 文法とはなにか

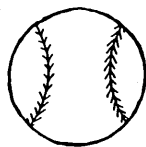
#### 1) 文と単語の分化

われわれは、いろいろなできごとやありさま、また、きもちやかんがえをことばによって人につたえる。ことばは、時間のながれにそってつらなる音声のまとまりでできているのだが、この音声のつながりは、文と単語という二種類の基本的な単位によってくざられている。

問題 つぎの絵は、どちらも、ふたつにわけられないのに、文はふたつにわけられる理由をかんがえてみよ。



いぬが はしる。  
モノの側面：イヌ  
運動の側面：ハシル



ボールは まるい。  
モノの側面：ボール  
性質の側面：マルイ

※ できごと、ありさまなど（現実）……………文であらわす。

※ もの、運動、性質、ようすなど（現実の断片）……単語であらわす。

現実のできごとやありさまはひとまとまりのものであるが、人間の言語では、その現実からモノ、運動、性質などの側面をひっぱりだして単語であらわし、その単語をくみあわせて文にしてあらわすのである。つまり、ひとつのまとまりである現実のできごとやありさまを、分析と総合の過程をおしてあらわすのである。

文と単語というふたつの単位が分化しているおかげで、わたしたちはいろいろな現実をあらわしわけることができる。つまり、文と単語の分化によって、言語は有限の単語によって無限にちかひさまさまの現実をあらわしわけることができるのである。もし、このことがなかったら、さまざまな現実のできごとやありさまのかずだけ、記号が必要になるはずである。

	はしる	とぶ	なく	……
いぬ				
さる				
きじ				
:				

$$2 \times 2 = 4, 10 \times 10 = 100, 100 \times 100 = 10000, \text{ etc.}$$

文は、単語をくみあわせてくみだてられることによって、場面からの独立が可能になる。一語文では、めのまえにないできごとやありさまをのべることができないが、二語文になると、それが可能になる。

バス！            きた！            バスが きた。

このことによって、言語は、過去のことで未来のことで、また、確かなことでも不確かなことでも、あらわすことができるようになった。そのため、そういうことをあらわしわけることが必要になった。つまり、文の場面からの独立は、あらためて、文のあらわすことがらが現実とどうかかわるかをあらわす手段を、文に要求したのである。

問題 つぎのア、イふたつの対は、それぞれ a, b のどちらののべかたについての対立か。

(a) 発話時との前後関係            (b) 事実の確認のしかた

ア. もうじき バスが くる。 — さっき バスが きた。

イ. バスが くる。 — バスが くるだろう。

このこととかがわって、運動をあらわす単語は、文の内容が現実とどうかかわるかをあらわすための形式を発達させてきた。

問題 例にならって単語を変化させよ。

例) はしる-はしった-はしろう-はしれ

よむ, かく, たべる, おきる, くる, する

ふたつ(以上)のモノによってなりたつできごとをあらわす文は、モノをあらわす単語をふたつ(以上)つかってくみだてなければならない。このばあい、それぞ

理由をかんがえよ。」という問題がありますね。この「いぬが はしる。」とか「ボールは まるい。」っていう文は、これは二つにわけられるんですけども、いぬがはしっている絵とか、ボールの絵とかは、これは二つにわけられない。もちろん二つにきろうとおもえば、きれいなことではないんですけども、意味のある二つの部分には、わけられないわけですね。で、それはなぜかということを経験にいわせると、いろんなことをいうんですが、結論をもうしますと、つぎのようなことなんです。

「いぬが はしる。」というのは、文というレベルでいいますと、「主語」と「述語」という二つの部分にわかれているんですけども、コトガラのレベルでは、二つの部分ではないんですね。へイヌガハシル」というコトガラは、まるごと一つのものであって、二つの部分にはわけられない。だから、その絵も二つにわけられないんです。「いぬが はしる。」という文のなかでの「いぬ」というのは、まるごとの現実からモノの側面をひっぱりだしている。そして、「はしる」というのは、運動の側面をひっぱりだす。つまり、へイヌガハシル」という、そういう、まとまった一つの全体を二つの部分にわけるとはならず、二つの側面からとらえているんです。そして、その二つの側面をあわせて、一つの文にしているんですから、その文を分解すれば、もとの二つの側面になるわけです。「ボールは まるい。」のほうも、おなじようにして、説明することができます。

で、ここでちょっとまとめておきます。現実のデキゴトやアリサマは、ひとまとまりのものであるが、人間の言語は、そのひとまとまりの現実からモノ、運動、性質などの側面をひっぱりだして単語であらわし、その単語をくみあわせて、文にしてあらわすのである。つまり、へ人間は、言語をつかうことによって、ひとまとまりの現実のデキゴトやアリサマを、分析と総合の過程とおして認識し、表現するのである」ということになるのです。

で、このことは、ドロー（図学）のほうにアナロジをもとめると、絵は見取図で、文は投影図だということになります、こっちからみると、モノの側面がみえて、こっちからみると、運動の側面がみえる。その両方をならべると、全体像がみえてくる。これ、投影図とおなじでしょう。

ところで、投影図式に、一つのデキゴトを二つの側面に分析してとらえるという、このとらえかたは、たいへんむずかしいので、おサルにはできません。一九五〇年代に伊谷純一郎氏が幸島や高崎山のサルのむれを観察して、ニホンザルは三〇種あまりのことばをもっていると報告されたように記憶しますが、それらはすべて一語文でありまして、ひとつのデキゴトを二つの単語で表現するような、高級なことばではないようです。

では、どのくらいのもむずかしさかといいますと、人間のこどもでいいますと、二語文がでてくるのは、だいたい満二歳前後です。それまでの一語文の段階、つまり、一語文しかいえない段階

は、ものごとのとらえかたが、ぜんぜんちがう。ふつう、「マンマ」というのは、ゴハンのあかちゃんコトバだとおもわれていますが、「マンマ」がタベモノというモノをさすようになるのは二語文がでるようになってからのことで、それまでの、あかちゃんコトバは、ヘオナカスイタ〜とかヘゴハンタベタイ〜とか、ヘオツパイノマシテ〜とかヘアノオカシトツテ〜とか、そういうタベモノにかかわるコトガラをバクセンとさすにすぎないのです。そもそも一語文の時代というのは、文と単語の分化していない時代のことですから、その表現作品は、文でも単語でもないわけです。

よく、国語学や心理学を大学で専攻したひとが、じぶんのこどもがうまれると、こどものことを記録するんだといって、はりきってはじめるんですが、たいていは二語文がでてきた途端に、おてあげになってしまふようです。もうどんどんあたらしいことはがでてきて、とてもおっつかなくなるんですね。二語文の成立しているのは、言語の成立ということでありまして、こどもの言語発達のうえてで飛躍的な時期なんです。

### 有限の単語で無限のデキゴト

二語文があると、どういうメリットがあるかという、まず第一に、プリントの2ページにかけてあるように「文と単語という二つの単位が分化しているおかげで、わたくしたちは、さまざま

まな現実をあらわしわけることができる」のです。表のように、いぬ・さる・きじ、はしる・とぶ・なく。これ、三かける三で、九つのデキゴトをあらわせる。それで、表の下にありますように、十かける十は百、百かける百は一万になるわけです。

われわれ、ふつうの日本人は、二万から三万の単語をしていますが、一万かける一万にしても、一億文になります。一億というのは、さて、どのくらいでしょうか。「いぬが はしる。」「ねこが はしる。」………というふうには、一文一秒で、ごほんもたべず、よるもねないで、となえつづけるとしたら、どのくらいかかるでしょうか。六十かける六十は三千六百、三千六百かける二十四は八万六千四百。八万六千四百かける三百六十五は三千百五十三万六千秒。これが一年ぶん。だから、一億秒は、三年たつても、まだ二か月たりないということになるわけです。ということとは、もう、ほんとうに無限に文がつけられるということですね。

いっぽう、サルのことばのことをかながえてみると、これは、二語文がいえない時代の一語文だから、三十の記号があつても、三十のデキゴトしかあらわせる。これ式にいけば、現実のかわりだけ記号が必要で、ことばの威力はカタオチです。人間のことばも、二万から三万のデキゴトしかあらわせる。三万秒なんて、半日もたないうちに、すんでしましますね。こういうことをかながえると、人間の言語が文と単語に分化しているということは、ほんとにすごいことなんだということがわかります。



## 二語文は目のまえにないことをつたえられる

それから、もうひとつメリットがあります。たとえば、バスをまわっているときなど、「バス！」とか「きた！」とかいうだけで、バスがきたことがわかりますね。これ、バスをまわっているときなら、いいんですけど、そうじゃないとき、たとえば、いまここで「バス！」といっても、なんのこともやらわからないでしょう。これは、二語文が使える時代になってからの一語文ですから、単語としては、りっぱな単語なんですけれども、それでも、一語だけでは、つたわらない。これを二語文にすると、つたわるようになる。「バスが きた。」といえば、バスがきたことがわかります。

一語文というのは、目のまえにないことは、つたわらないのだけれども、二語文になると、目のまえにないことでも、つたわるわけです。そして、目のまえにないことでもつたわるということとは、過去のことでも、未来のことでも、つたわるということと、コミュニケーションの大革新ということになるわけです。おまけに、現実には、ないこと、つまり、ウソのことでも、あらわすことができるのです。たとえば、オオカミがきてなくても、二語文をつかえば、「おおかみがきた。」といって、ウソをつくことができるのです。ウソがつけるということは、すごいことです。つまり、ないことを想像によって創造するのですから、かんがえる活動も、これによって

展開することができます。目のまえにないことをいえるというのは、こういうことなんです。けれども、言語は、ウソをつくためにあるんではない。いつもウソをついていると、コミュニケーションが断絶して、いざというときに、オオカミにくわれてしまう。言語は、コミュニケーション、つまり、ものごとをつたえるために、ながい時間をかけて発達してきた手段ですから、「コレハホントダ」 「コレハウソダ」ということが、基本的には、わかるようになっていて、「バスがくる。」とか 「バスがきた。」とか 「くるだろう。」とか 「くるらしい。」とか、「くるかもしれない。」とか 「くるにちがいない。」とか、「くるようだ。」とか 「くるはずだ。」とか、そういうことを、ちゃんといいわけられるようになっていて、「くるから、動詞も、ハシル・ハシッタ・ハシルダロウ・ハシッタダロウ・ハシロウ・ハシレなどのように、語形を変化させるのです。」つまり、動詞の活用は、言語が文と単語に分化したことによってうみだされたものなんです。

### 文と単語があるから文法がある

二語文が未来のことも過去のことも、さらに、ホントのこともウソのこともあらわせる。そういうことから活用ができたのだとすれば、二語文というのは、文法にとって、たいへんだいじなものだ、ということになりますね。けれども、それだけではないんです。そもそも「文法とはな

にか」というと、それは、単語を材料にして文をつくるための法則のことなんです。ですから、文と単語がなかったら、そもそも、文法などというものは存在しない。文と単語は、文法そのものの存在とかかわっているんです。

ところで、こういうはなしを学生にしましたあとで、「さっきニホンザルは三十数種の記号をもっている、はなしたが、ニホンザルのことばに文法があるとおもうか。」とたずねましたら、くびをかしげて、かんがえてるやつがいる。わたしが「だって、単語を材料にして文をつくる法則が文法だろう。」といいましたら、「あつ、そうか、文と単語の分化していないことばに、文法のあるはずがないというわけですか。」といって、ようやく、えがおをみせてくれました。

## 二、マークされた語形とマークされない語形

わたくしたちがならってきた「国文法」というのは、助詞・助動詞が中心になってい るんです。ほんとうの文法はそんなもんじゃありません。これからちよつとおはなししたいとおもいます。

### 「かれ」は「学生」とちがつて単数

まず人称代名詞の4ページ（プリントの転載を省略）の問題の「『学生は3人もきた。』とい

えるのに、『かれは3人ともきた。』といえないのはなぜか。』というんですね。これをちよつと  
かんがえていただきます。(問) これはですね、「学生」というのは、単数と複数の区別がない。  
ところが、「かれ」というのは単数でありまして、複数にならないから、こういうことになる  
というわけです。で、そのすぐ下に人称代名詞の表(略)がありますけれども、これは、単数と複  
数がわけてかいてある。こういうふうに、わけてかいてある文法書は、じつは、いまでも、ほと  
んどないですね。なぜかという、名詞と代名詞は、おなじ文法的な性質をもっているというの  
が常識になっていて、代名詞は、名詞とちがって、数のカテゴリーがあるなんていうことは、ま  
ったく考慮のなかにはいっていないからなんです。

「国文法」では、「ら」とか「たち」とかいうのが複数をあらわす接尾辞であるということ、  
みんなが知っているんですが、それでは、「ら」や「たち」のつかない形はどうなんだというこ  
とになると、そういうことは研究の対象にしていないのです。なぜそんなことになるのかとい  
うと、「国文法」では、助詞とか助動詞とか接尾辞とか、そういう形態素に文法的な意味をもとめ、  
単語の語形に文法的意味をもとめないからなんです。

形態素というのは、単語の語形をつくるために、くつつける要素です。いまのべている「た  
ち」や「ら」は、「学生たち」「彼女たち」あるいは「むすめら」「かれら」のような複数形とい  
う語形をつくるための形態素なんです。語形は、フルネームでいうと、単語の文法的な形

(grammatical form of word) ということになりますが、これは、単語が文のなかでとる形のこと、単語の文法的な意味は、この、語形という単位で実現するのです。いまのばあいのこと、でいうと、「学生たち」とか「かれら」とかいうのが複数形で、「たち」や「ら」は、その複数形をつくるための形態素にすぎないのです。

それから、もう一つだいじなことは、形態素のついてないのも語形で、これは、マークされない語形 (unmarked form) といいます。形態素のついていないほうの語形がマークされた語形 (marked form) なのです。「国文法」には語形概念がないので、「かれ」が単数形で、「かれら」は複数形だということに関心をしめしません。それでも、形態素は問題にしますので、複数形のほうは、まがりなりにもアタマのすみにのぼってきますけれども、形態素のほうは、形態素がないので、アタマのすみへさえのぼってこないのです。その結果、へかれーかれらゝは単数と複数の対立であり、へ学生ー学生たちゝは、「学生」のほうが数に無関心で、そういう対立をなしていないという、とてもたいせつな文法的事実がおきざりにされてしまっているのです(注1)。これは、単数・複数の対立だけではない。もっとだいじなへするーしたゝというテンスの対立も問題にしてこなかった。このことについては、あとでのべることにします。

## 文法的なカテゴリー

わたくしどものテキストでは、いまの問題のあとに、もう一つ問題がありまして、「日本語の人称代名詞は、名詞とちがって、数のカテゴリーをもっているということ、文法的カテゴリーの定義にしたがって説明せよ。」となっています。

カテゴリーとはなにか。カテゴリーっていうのは、三高のときは、むずかしかったですね。「範疇」なんて漢語にするから、なおわからない。アリストテレスとかカントとかをよんでいて、カテゴリーって、アタマいたかったですけど、ほんとは、わりと簡単なんです。へおなじ一般的な性質のもとに、特殊な性質をもったものが分化しているとき、その一般的なほうをカテゴリーという、といふうにいえば、簡単です。人間において、性という一般的な性質のもとに男と女が分化しているので、人間には性というカテゴリーがあるということになるわけです。アリストテレスやカントでは、一般的な性質を上位へ上位へあげていって、もうこれ以上あげられないという最高位のものだけをカテゴリーというから、むずかしかったです。あれは、それこそ特別のカテゴリーだったんですね。

文法ではどうかといえますと、一つの一般的な文法的意味のもとに、いくつかの特殊な文法的意味をになう形式がわかれているとき、その一般的な文法的意味を文法的なカテゴリーといいます。代名詞においては、「数」という一般的な文法的意味のもとに、単数をあらわす語形と複数をあらわす語形がわかれて、対立している。だから、「数」というカテゴリーがあることになる。

これに対して、日本語の名詞は、「数」という一般的な意味のもとに単数をあらわす語形と複数  
をあらわす語形がきちんとわかれていない。だから、日本語の名詞には「数」のカテゴリーがき  
ちんとそなわっていないということになる。というのが、この問題のこたえです。

### 格助詞でなく、格語形がはたらく

格関係にしても、国文法では格助詞があらわすといわれてきたんですが、ほんとにそうでしょ  
うか。(この項も、プリントの転載を省略) 4 ページにテ格というのがありますね。「とうふは刃  
のないほうちようでできる」「石で字をかく」の「ほうちようで」「石で」は、道具をあらわしてい  
るんですけども、「道具だっていることが、どうしてわかるか」ときくと、「『で』がついてる  
から」というこたえがかえってくる。だけど、これ、ほんとうででしょうか。

それから5番、「信号機の故障で列車がとまっている」「きようは、ふつかよいであたまがぐる  
ぐるまわる」。これは原因になる。それから4番の「武田信玄と上杉謙信は川中島でであった」  
「おもてでひとのこえがする」というのは、場所をあらわしています。これらのちがいは、「で」  
だけでは説明できませんね。

これは、モノをあらわす名詞のテ格は道具をあらわす、デキゴトをあらわす名詞のテ格は原因  
をあらわす、場所をあらわす名詞のテ格は場所をあらわすと、こういうふうになっていますね。

このような例をごらんになれば、格関係は格語形があらわすのであって、格助詞があらわすのではないことがわかるでしょう。格助詞は、格語形をつくるための形態素にすぎないのです。(注2)

### テンスとアスペクトとの四語形

こんどは、動詞のはなしをします。このプリントの「1 テンスとアスペクトの4語形」というところへいきます。(つぎのページ)これは、ちよつとゆつくりかんがえてみたいとおもいます。この問題をやっていただきましょう。(解答のあいだ、まつ。)

それでは、解答していきましよう。最初の「いま たべる」と「いま たべた」は、〈未来—過去〉に対立しています。〈現在—過去〉じゃないですね。どちらも、「いま」という副詞、あるいは時間名詞かもしれませんが、これがついていきますけれども、「いま ごはんを たべる。」というのは、まだたべていないですね。これからたべるんですから、未来。で、「いま たべた」というのは、もうたべたのですから、過去。ですから、これは、未来と過去に対立している。「たべて いる」と「たべて いた」はどうかといいますと、これは、〈現在—過去〉に対立しています。そして、いずれも、時間軸上のどこをしめるかという点で対立する。

この問題、むしろ「国文法」にゴリゴリのひとが「時間というものに関心をしめさないか、しめすか」というところにマルをつけたりするんです。助動詞がつかないか、つくかで判断してし



## I テンスとアスペクトについての基本的なこと

### 1. テンスとアスペクトの4語形

問題 つぎの4例をよく検討して、そのあとのA)、B)の、それぞれの( )のなかに、それぞれその下のどれかをいれよ。

- ・かれは いま ごはんを たべる。
- ・かれは いま ごはんを たべた。
- ・かれは いま ごはんを たべている。
- ・かれは いま ごはんを たべていた。

A) 「いま ごはんを たべる」と「いま ごはんを たべた」とは(①)という点で対立している。また、「いま ごはんを たべている」と「いま ごはんを たべていた」とは(②)という点で対立している。この両者をいっしょにすると、つぎのようにいうことができる。《「たべる」と「たべた」、あるいは、「たべている」と「たべていた」は、(③)という点で対立している。》

- (ア) 未来か過去か      (イ) 未来か現在か      (ウ) 現在か過去か  
 (エ) 時間というものに関心をしめさないか、しめすか  
 (オ) 時間軸のうえの、どの位置をしめるか

B) 「いま ごはんを たべている」というばあい、たべる動作は「いま」という時間を(④)。しかし、「いま ごはんを たべる」というばあいには、たべる動作は「いま」という時間を(⑤)。「さっき ごはんを たべていた」と「さっき ごはんを たべた」とのあいだにも、おなじような対立がある。

- (カ) またいでいる      (キ) 無視している  
 (ク) またいでいない      (ケ) 無視していない

現代日本語の動詞は、アスペクトのカテゴリーをもち、完成相と継続相に対立する。そして、この両形式は、さらにテンスによって非過去形と過去形にわかれる。このことによって、動詞は、アスペクト・テンスの観点から、つぎの四つの語形をもつことになる。

テンス \ アスペクト	完成相	継続相
非過去形	する	している
過去形	した	していた

アスペクトもテンスも時間に関係した文法的カテゴリーであるが、アスペクトは、動詞のあらゆる運動が、基準となる時間とどのようにかかわるかについてのカテゴリーであり、テンスは、動詞のあらゆる運動が、時間軸上のどこに位置するか(基本的には、発話時とどうかかわっているか)にかかわるカテゴリーである。

まうんですね。国文法では、助動詞のつかない「たべる」という語形はあつかわれない。しかし、多くの日本人は、はじめ、「事実をよくみつめてみる」というまえは、「たべる」と「たべた」の対立はなにかときくと、「現在と過去の対立です。」とこたえる。「現在形と過去形です。」というものもある。「国文法」でならわなくても、「英文法」で現在形と過去形をならうんで、それだとおもうわけです。テンシ的な対立をおしえてくれている点で、教科としての「国文法」は、教科としての「英文法」に感謝しないといけないんですが、ただ、「現在形」「過去形」という名まえがついているので、これが未来と過去の対立だとわかるためには、やっぱり事実をきちんとみつめる習慣をつけてやる必要があります。

ところで、日本語の動詞は、「ある」「いる」「みえる」のように状態をあらわすものをのぞけば、非過去形が未来をあらわすということは、現在の文法研究では常識だし、町の日本語学校でも、これはちゃんとおしえていきますけれども、国文法しか知らないひと、たとえば、高等学校の国語の先生は、そんなことに気がついていないひとのほうが多いとおもいます。「国文法」のおかげで、現実をみつめる目をつぶされてしまっているんですね。そういう現状、ひじょうになさけない現状があるわけです。

そのつぎに、Bのほう、これはどうか。「いま ごはんを たべて いる。」というのは、「いま」という時間をまたいでいるんですね。これに対して、「いま ごはんを たべる」とか「た

べた」とかいうほうは、「いま」という時間をまたいでいないわけです。この「する」と「している」の対立はアスペクトの対立というんですが、「する」のほうは完成相、「して いる」のほうは継続相といわれています。この両者は、どういふふうに対立するのでしょうか。

「する」というのは、はじめからしまいまでまとめて、まるごとのすがたでさしだす。「はしる」「はしった」というのは、「これからはしる」にしても、「さっきはしった」にしても、はしりはじめてから、はしりおわるまでをひとまとめにして、「はしる」とか「はしった」とかっていうんです。

それから、「して いる」「して いた」というのは、基準時間をまたいでいますから、基準時間のがわからみると、動作のなかにわりこんでいることになるわけです。ですから、「する」と「して いる」の対立を基準時間のがわからみると、わりこんでいないか、わりこんでいるかという対立になるわけです。

このところを、いちばん先端のアスペクト学説でいいますと、(アスペクトはスラヴ語でいちばん発達しているので、やはりスラヴ語の研究の成果をかりると、よくわかるのですが、)完成相と不完全相の対立は、運動を外からみるか、内からみるかの対立だということです。これを、もうすこしくだいて、いうと、完成相は、運動のまるごとのすがたを外からガバツととらえてあらわす形式であり、不完全相は、運動の途中にそのなかへはいりこんで、うしろとまえを内から

キョロキョロながめてとらえる形式だといえるとおもいます。(なお、未完成相にはいくつかの種類があつて、日本語の未完成相は、継続相に属しています。)

こういうわけで、日本語の動詞は、基準時間とどうかかわるかというアスペクトの点で完成相と継続相があり、それが、時間軸上のどこに位置するかというテンスによって非過去形と過去形に変化するので、さっきの問題の下にしめた表のように、テンスとアスペクトの観点から四つの語形ができるわけです。

### 完成相はなぜ現在の運動をあらわさないのか

テンスとアスペクトのしめくりとして、この両者の関係のことにふれておきたいとおもいます。それは、「する」「たべる」「はしる」など、完成相の非過去形がなぜアクチュアルな現在の運動をあらわさないかという問題です。そのこたえは、完成相は運動をまるごとのすがたでとらえるので、現在という瞬間のなかにおさまりきらないということです。

過去があつて、未来があつて、そのさかじめが現在。現在というのは、瞬間なんです。ところが、完成相は運動を、はじまりからおわりまで、まるごとのすがたでとらえる。はしりはじめから、はしりおわるまで。たべはじめから、たべおわるまで。こういうものをまるごととらえると、とても瞬間にはおさまらないですね。

こうしたテンスとアスペクトの関係は論理的ですから、この法則は、完成相と未完成相の対立のある、どの言語にも通じるのです。中国語の「你吃飯嗎」(ごはんをたべますか)も未来ですし、英語の「He runs,」も未来です。はしっているひとをゆびさして、「He is running,」といわないで、「He runs,」というと、おかしいんですが、にもかかわらず、はしっているやつをゆびさして、「He runs,」ということがある。それは、さっきケガをしたやつが、いまははしっているのを見て、「あいつ、はしれるやんか。」というようなときに、そういうんだそうです。これは、アクチュアルな運動をあらわしているんじゃないですね。

#### 完成相が現在の運動をあらわすとき

けれども、完成相で現在をあらわすこともあります。さきほど現在は瞬間だといいましたが、その瞬間は、長さゼロではないんです。文法で現在というのは、発話時のことで、それは、はなはじめから、はなしおわりまで、すこしのアイデアがあるのです。「はしる」と発話するとき、ハからルまで、ハ・シ・ルを発音するアイデアがあるんです。そのアイデアにまるごとおさまるような運動だったら、現在のことをいえるんです。「ランナー二壘をまわります。」というの、これ、だいじょうぶなんですよ。「マ・ワ・リ・マ・ス」というアイデアに、まわりはじめてから、まわりおわるまでの動作がまるごとおさまるから、これ、いえるんです。「おかね、ここにおきます

よ。」それから、手品で「これをこういれますね。」などというのも、このなかまです。

このなかまでもしろいものに、パーフォーマティブな発言というのがあります。「おねがいます。」「ことわる。」「わたしは、さんせいします。」などの発言は、そのように発言すること自身が、その行為をしたことになりますね。こういうのをパーフォーマティブな発言というのですが、こういうばあいは、発言のはじまりからおわりまでと、行為のはじまりからおわりまでとが、きちんと一致していますので、運動がいつばいいつばい発話時におさまることになって、非過去形が現在の運動をあらわすことになるのです。

このようにみていきますと、完成相の非過去形という、マークされない語形がたいへん重要な役わりをはたしていることがわかります。けれども、この語形は、助動詞がついていませんので、国文法では、まったく問題にされないのです。国文法は、こういうものをおさめる視野をもっていないのです。

### 動詞の活用表

いままでテンスとアスペクトの基本について、おはなししてきましたが、あとのことをのべる余裕がありませんので、最後に、動詞の基本的な活用表をしめして、おわることにします。

この表の左上にななめの線でくざられた、五つの区画がありますが、ここにしめされているの

## 動詞の基本的な活用表

機能		ムード		ていねいさ		みつつ体の形式(みつつ体の動詞)		ていねい体の形式(ていねい体の動詞)	
				みとめかた		みとめ形式	うちけし形式	みとめ形式	うちけし形式
				テンス		(みとめの動詞)	(うちけし動詞)	(みとめの動詞)	(うちけし動詞)
終止形	のべ たて形	断定形	非過去形	よむ	よまない	よみます	よみません		
			過去形	よんだ	よまなかった	よみました	よみませんでした		
		推量形	非過去形	よむだろう	よまないだろう	よむでしょう	よまないでしょう		
	さそいかけ形 命令形	過去形	よんだ(だ)ろう	よまなかった(だ)ろう	よんだでしょう	よまなかったでしょう			
			よもう	(よむまい)	よみましよう	(よみますまい)			
			よめ	よみな	よみなさい				
連体形		非過去形	よむ	よまない	(よみます)	(よみません)			
	過去形	よんだ	よまなかった	(よみました)	(よみませんでした)				
中止形	第1ななどの 第2ななどの  ならべたて形		よみ よんで  よんだり	よまず(に) よまないで (よまなくて) よまなかったり	よみまして  (よみましたり)	よみません(でして)  (よみませんでしたり)			
条件形	(パー条件形) (ナラ条件形) (タラ条件形) (ト条件形)		よめば よむなら よんだら よむと	よまなければ よまないなら よまなかったら よまないと	(よみますれば) (よみますなら) よみましたら よみますと	よみませんでしたら よみませんと			
譲歩形 ザリイ	(チモー譲歩形) (タツテ譲歩形)		よんでも よんだって	よまなくても よまなくて	よみましても	(よみませんでしたも)			

がカテゴリーです。このワクから、下なり右なりへのばしていきますと、それぞれのカテゴリーに属する語形の名まえが得られます。そして、それをさらに中のほうへのばすと、その名まえの語形の具体的なすがたがえられます。たとえば、ていねい体のみとめ形式の、終止形ののべたて形の推量形の過去形は、「よんだでしょう」ということになります。ひとつの語形は、いろいろなカテゴリーをになっています。たとえば、あるひとりの人間が日本人で、男性で、老人で、……というようなもので、この活用表は、そのようなシステムのなかで語形をとらえているのです。

この表にしめされているように、それぞれのカテゴリーは、みんな、マークされない語形とマークされた語形の対立と統一によって、かたちづくられています。そして、どのカテゴリーにも共通する「よ

む」というマークされない語形が左上にあって、このパラダイムのカナメになっています。このことは、マークされない語形の重要さをものがたっているのだということができるとおもいます。なお、つけたしておきますが、この表は、基本的なパラダイムをしめたものであって、これが、さらにおおきなひろがりになっていきます。たとえば、継続相の「よんで いる」やうけみ態の「よまれる」は、この表より上の層にあって、それぞれが、この基本的な活用表をもっているのです。「よんで いる」のばあいでは、この表の上の段（断定形の非過去形）で、へよんでいる—よんでいない—よんでいます—よんでいませんとなり、それが、それぞれへよんでいる—よんでいた—よんでいるだろう……のように、下へおりていきます。

以上簡単におはなしもしあげましたが、現在の文法論では、いろんな層での単語や文の現象をシステムのなかでとらえる。または、そういうものをとらえて、位置づけることのできるシステムをみつけていくようなしごとがされているわけです。

こういうことで、おわらせていただきます。

注 1、「学生」と「かれ」をつかって、カテゴリーのありなしを論じる方法は、一九八〇年ころ、工藤浩からまなんだ。



2、このことは、奥田靖雄「で格の名詞と動詞のくみあわせ」(言語学研究会編一九八三『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房)のなかでのべられている。

(立正大学教授・国立国語研究所名誉所員)